

石皿から臼へ

— 最新情報展第3期展示レポート —

田 村 博

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

はじめに

1. 縄文時代の石皿・臼

2. 弥生時代の石皿・臼

3. 古墳時代～平安時代の石皿・臼

4. 鎌倉時代～江戸時代の石皿・臼

おわりに

—— 要 旨 ——

群馬県内の出土資料から、石皿から臼への製粉具の変遷を通史的に概観する。平成29年度発掘情報館最新情報展第3期「一万年つづく粉食文化—縄文クッキーからおっきりこみまで—」の展示レポートである。

キーワード

対象時代 縄文時代以降

対象地域 群馬県

研究対象 石皿、臼

はじめに

本稿は、平成29年度発掘情報館最新情報展第3期「一万年つづく粉食文化―縄文クッキーからおっきりこみまで―」の展示レポートである。

日本列島における堅果類や穀類の粉化・搗砕・磨り潰しの問題を通史的に考えることは、食生活史を考える上で重要である。そのためには、考古資料としての石皿・磨石や臼等の製粉具^(註1)、そして民俗例などの検討が不可欠である。しかし、石皿・磨石や臼は注目される遺物とは言い難い状況にあるとせざるをえない。

そこで、筆者は、平成29年度発掘情報館最新情報展第3期の担当として、「一万年つづく粉食文化―縄文クッキーからおっきりこみまで―」のテーマを与えられたことにより、当事業団の発掘資料を中心に、群馬県内出土の石皿・磨石、臼等を展示し縄文時代から江戸時代まで通史的に概観することとした。そして、この展示を作製する過程において、従来の石皿・臼の変遷模式図^(註2)を改めるに至った。本稿は、この改訂した変遷模式図(図1)を掲げ、群馬県内出土の製粉具の変遷を概観(図2～3)するものである^(註3)。

1. 縄文時代の石皿・臼

石皿・磨石については、旧石器時代にも存在するが、群馬県内からは確認されていない。縄文時代早期になると数点の出土例がある。

縄文時代を通じて見られるのは、無縁石皿である。縄

文時代前期から晩期にかけては、無縁石皿と並び有縁石皿が存在する。すなわち、まず石皿の基本形態として無縁石皿が存在し、そこから有縁石皿が派生すると考えられる^(註4)。

石皿の用途・機能は主に堅果類の粉化・搗砕・磨り潰しと考えられるが、他に動物質食料の叩き潰し・磨り潰しや赤色顔料の調合にも用いられたと考えられる。また、「第二の道具」^(註5)としての性格も持ち合わせていたとも考えられる。この場合、石棒の男性(男性器)に対し、石皿は女性(女性器)となる^(註6)。

臼については、群馬県内からは確認されていないが、縄文時代前期の竪杵が鳥浜貝塚(福井県)、晩期の竪杵が山王罌貝塚(宮城県)から出土しており、対となる搗臼の存在が想定される^(註7)。弥生時代以降の臼との関係は不明である^(註8)。

2. 弥生時代の石皿・臼

石皿については、弥生時代を通じて見られるのは、無縁石皿である。しかし、全国的に見ても出土数は縄文時代に比べて激減する^(註9)。そのような中で、近年、群馬県内では弥生時代の無縁石皿の出土が相次いでおり、注目に値する^(註10)。

臼については、弥生時代に入ると搗臼と竪杵の組み合わせが稲作技術とともに伝来し、以後、穀類の脱穀・精白・粉化などに用いられたとされる^(註11)。

	石皿 (在来技術)	臼 (中国朝鮮伝来技術)				製粉機 (欧米伝来技術)
縄文時代	無縁石皿 有縁石皿 搗臼?					
弥生時代		搗臼				
古墳時代～平安時代		挽臼		薬研		
鎌倉時代～江戸時代			「茶臼」の普及 「石臼」の普及		搗鉢	
明治時代以降						製粉機

図1 石皿と臼の変遷(田村2008を改訂)



図2 出展遺物(1)



図3 出展遺物(2)

3. 古墳時代～平安時代の石皿・臼

古墳時代以降の石皿については、出土数が弥生時代よりさらに少なく、実態は不明である。しかし、群馬県内では弥生時代と同様に、近年、古墳時代～平安時代の無縁石皿の出土が相次いでいる^(註12)。

臼については、古墳時代終末の7世紀頃までに挽臼が伝来する。文献史料においては、『日本書紀』の推古天皇18(610)年春3月条に「高麗王貢上僧曇徴。法定。曇徴知五経。且能作彩色及紙墨。并造碾磑。蓋造碾磑始于是時歟。」^(註13)とあり、『倭名類聚抄』には見出しに「茶研」^(註14)の語がある。

出土遺物としては、阿波国分尼寺(徳島県)の礎石に転

用された挽臼があり、唐招提寺(奈良県)や観世音寺(福岡県)には奈良時代以来と推定される伝世遺物がある。しかし、全国的にも挽臼が普及するのは鎌倉時代以降であり、群馬県内からも平安時代以前のもものは確認されていない。搗臼は数少ないながらも出土している^(註15)。

4. 鎌倉時代～江戸時代の石皿・臼

石皿・磨石については、鎌倉時代以降の出土例は確認されていない。

臼については、挽臼の出土例が増えるのは前記のように鎌倉時代以降のことであり、江戸時代には爆発的に増加する^(註16)。群馬県内からも数多く出土している。特に、

表1 出展遺物一覧

種別	No.	遺跡	所在地	遺構	時期	報告書	図版	備考
縄文 石皿	1	上原Ⅰ遺跡	吾妻郡長野原町	91区6住	花積下層	谷藤(編) 2015『上原Ⅰ遺跡・上原Ⅲ遺跡・林宮原遺跡』	24頁第17図16	無縁
	2	尾坂遺跡	吾妻郡長野原町	5住	中期後半	小野2016『尾坂遺跡(2)』	44頁第28図48	無縁
	3						45頁第29図49	無縁
	4	中西原遺跡	伊勢崎市	1区3住	諸磯c	大西(編) 2012『中西原遺跡』	45頁第29図50	無縁
	5						28頁第22図19	有縁
	6	芳賀東部団地遺跡	前橋市	遺構外	前期後半～中期	関(編) 2013『芳賀東部団地遺跡』	342頁第342図外344	有縁
	7	下田遺跡	伊勢崎市	1区3住	加曾利E 4～称名寺1	小林徹2008『下田遺跡(2)』	49頁第18図15	有縁
	8	大道東遺跡	太田市	遺構外	称名寺1	岩崎(編) 2009『大道東遺跡(1)』	149頁第128図560	石製品として報告、有縁
弥生 石皿	9	長谷津遺跡	安中市	34住	栗林	飯田(編) 2012『長谷津遺跡』	35頁第29図6	台石(本文)・石皿？(観察表)として報告
	10			42住	樽		136頁第128図4	
	11			43住	樽		140頁第132図32	13と対
	12			60住	樽		173頁第163図10	低石(本文)・台石(観察表)として報告
弥生 磨石	13			43住	樽		140頁第132図31	11と対
古墳 石皿	14	山王・柴遺跡群	前橋市	1区23住	6世紀後半	長谷川(編) 2016『山王・柴遺跡群』	123頁第114図9	
古墳 搗臼	15	新保田中村前遺跡	高崎市	2-1河川	前期	下城1994『新保田中村前遺跡Ⅳ』	本文遺物観察表編209頁第193図w31	
古墳 竪杵	16	新保遺跡	高崎市	B溝	前期	佐藤明1986『新保遺跡Ⅰ』	図版編図版124w190	
平安 石皿	17	山王・柴遺跡群	前橋市	3区2住	9世紀第2四半期	長谷川(編) 2016『山王・柴遺跡群』	59頁第46図4	
中近 世挽 臼	18	前橋城跡	前橋市	13溝	中世末～近世初頭	黒澤2014『前橋城跡』	157頁第113図126	19と対？
	19						157頁第113図128	18と対？
	20	東宮遺跡	吾妻郡長野原町	Ⅳ区8屋16建	天明泥流(1783)下	中沢2017『東宮遺跡(3)』	245頁第181図30	21と対？
	21						245頁第181図31	20と対？
中近 世播 鉢	22	田谷遺跡	太田市	2区105土坑	中世～近世	田村(編) 2015『田谷遺跡』	200頁第141図105土坑1	
	23	世良田環濠集落遺跡	太田市	2土坑	近世～近代	高井(編) 2015『世良田環濠集落遺跡(1)』	22頁第10図29	
	24	吉井川下宿遺跡	高崎市	1井戸	近世～近代	大西・飯田2013『吉井川下宿遺跡』	26頁第24図40	

※実際の出展遺物と一部異なる場合がある

ハッ場ダム地域(吾妻郡長野原町)の天明3(1783)年の浅間山噴火に伴う泥流で埋没した遺跡からは、多くの挽臼が出土しており、注目に値する。また、播鉢は鎌倉時代までに伝来しており、これも群馬県内からも数多く出土している。

民俗例においても粉化・搗碎・磨り潰し用具として多く取り上げられるのは、搗臼・竪杵、挽臼等である。石皿・磨石がまったく使用されないというわけではないが、もはや縄文時代のように主役として扱われることはない。民俗例における製粉具の主役は、石皿から臼へと変わっているのである。

おわりに

筆者はかつて、石皿・臼等の製粉具の変遷過程を、1期「石皿」、2期「石皿・臼併用」、3期「臼中心」の3期に分類した^(註17)。今回、改めて考えるに、群馬県内においては、弥生時代を1期・2期いずれかに入れるか判断の

難しいところではあるが、1期＝縄文時代、2期＝古墳時代～平安時代、3期＝鎌倉時代～江戸時代とすることに大きな問題はないであろう。2期とした段階の資料が少ないことが心もとないが、今後、類例の増えることに期待したい。また、筆者の気付かぬ例がある場合には何卒ご教示いただきたく、お願い申し上げる次第である。

本稿においては、先学諸兄の敬称を略させていただいた。何卒、ご容赦頂きたい。また、展示作成および執筆にあたり以下の方々に指導・助言をいただいた。記して感謝いたします。

小島敦子、佐藤元彦、高島英之、津島秀章、徳江秀夫、洞口正史、松村和男

註

(註1) 製粉具の総称としては、通常、「石皿」も含めて「臼」が用いられる。しかし、情報展第3期展示および本稿では、原則として中国朝鮮伝来の技術体系によるもののみ「臼」を用いた。縄文時代以来の在来の

- 技術体系による「石皿」と区別するためである。
- (註2) 田村2008。
- (註3) 情報展第3期展示における「現代群馬の粉食文化」については、本稿では省略した。
- (註4) 石皿の分類は以下の通り(田村2013a・2014(田村2000・2001・2010を改訂した))。Ⅰ類が無縁石皿、Ⅱ・Ⅲ類が有縁石皿である。
- Ⅰ類 縁の形成が見られない
- a平坦な作業面を有する
- b浅く凹む作業面を有する
- Ⅱ類 縁の形成が見られる
- a平坦な作業面を有し、縁の形成が見られる
- b浅く凹む作業面を有し、ゆるやかに立ち上がる縁の形成が見られる
- c溝状に凹む作業面を有する
- Ⅲ類 縁および作業面中央部の島状の高まりの形成が見られる
- (註5) 小林達1977。
- (註6) 石皿を女性(女性器)とし、石棒を男性(男性器)として対をなすとする、所謂、陰陽二説は、鳥居龍蔵により唱えられた(鳥居1924)。なお、石棒を男性(男性器)とする考え方はこれよりも約30年早く、大野延太郎により唱えられている(大野1896)。中谷治宇二郎以来の否定論もある(中谷1929)。
- (註7) 須藤(編)1997。鳥浜貝塚研究グループ1984。名久井2004。
- (註8) 名久井文明は連続性を指摘するが(名久井2004)、ここでは判断を保留し、関係は不明としておきたい。
- (註9) 田村2003・2013b。浜田1992・2007。
- (註10) 長谷津遺跡(安中市)からは、群馬県内最多の6点の弥生時代の石皿が出土している(飯田(編)2012)。これに関連してのことであるが、弥生時代以降の竪穴住居床面直上から出土する扁平礫には、石皿(もしくは台石)と考えられるものがありはしないか疑問である。近年の相次ぐ報告は、石皿等への関心の高まりを示すものであり、これまでは「石皿＝縄文時代」とされ、無意識のうちに弥生時代以降のものも縄文時代とされてきたのではないか。または、発掘調査時にも資料整理時にも、注意を向けられることがなかったのではないか。実態としては、より多くの弥生時代以降の石皿が出土しているのではないか。
- (註11) 以下、白について、群馬県内における出土状況の他は、三輪茂雄の一連の研究によるところが大きい(三輪1978・1987・1994・2005)。
- (註12) 東上之宮遺跡(伊勢崎市)、山王・柴遺跡群(前橋市、前橋市0013遺跡・前橋市0014遺跡)、下田遺跡(吾妻郡長野原町)から数点出土している(小林正(編)2015。長谷川(編)2016。佐藤元2017)。
- (註13) 黒板1974、pp.152。
- (註14) 京都大学文学部国語学国文学研究室1968、pp.224ほか。「研」はいわゆる薬研か。『倭妙類聚抄』には、他に「臼」「礪」等も記載されている。
- (註15) 新保田中村前遺跡(下城1994)から出土している。
- (註16) 日本国内においては、挽臼は茶の湯とともに広まった。茶道具として茶臼が欠かせないためである。この茶臼の技術が、粉挽臼(いわゆる「石臼」)の普及へとつながる(三輪1978・1987・1994・2005)。また、挽臼は火薬の製造にも欠かせない。
- (註17) 田村2008。なお、情報展第3期展示では、これに4期「製粉機」の段階(＝明治時代以降)を加えた。

参考文献

- 安達厚三1983「石皿」『縄文文化の研究』第7巻(道具と技術) 雄山閣 pp.129-139
- 飯田陽一(編)2012『長谷津遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 岩崎泰一(編)2009『大道東遺跡(1)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 大西雅広(編)2012『中西原遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 大西雅広・飯田陽一2013『吉井川下宿遺跡』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 大野延太郎1896「常陸国霞ヶ浦沿岸旅行談」『東京人類學會雑誌』第11巻 第123号 東京人類學會 pp.352-353
- 小野和之(編)2016『尾坂遺跡(2)』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 上條信彦2007「石皿と磨石」『縄文時代の考古学』第7巻(なりわい) 同成社 pp.110-125
- 上條信彦2015『縄文時代における脱穀・粉碎技術の研究』六一書房

- 京都大学文学部国語学国文学研究室1968『諸本集成倭名類聚抄』本文篇 臨川書店
- 黒板勝美1974『日本書紀』後篇(新訂増補國史大系普及版) 吉川弘文館
- 黒澤照弘2014『前橋城跡』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 小林達雄1977「土偶」『日本陶磁全集』第3巻(土偶・埴輪) 中央公論社 pp.45-53
- 小林徹2008『下田遺跡(2)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 小林正(編)2015『東上之宮遺跡』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 佐藤明人1986『新保遺跡1』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 佐藤元彦2017『下田遺跡(2)』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 下城正1994『新保田中村前遺跡IV』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 須藤隆(編)1997『国史跡山王岡貝塚発掘調査報告書Ⅱ』一迫町教育委員会
- 関晴彦(編)2013『芳賀東部団地遺跡(縄文時代以降編)』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 高井佳弘(編)2015『世良田環濠集落遺跡(1)』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 竹田元(編)2010『粉もの上州風土記』(第88回企画展図録) 群馬県立歴史博物館
- 谷藤保彦(編)2012『北山遺跡』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 谷藤保彦(編)2015『上原Ⅰ遺跡・上原Ⅲ遺跡・林宮原遺跡』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 田村博2000「石皿考―石皿分類私案―」『多摩考古』第30号 多摩考古学研究会 pp.45-51
- 田村博2001「石皿・磨石の組み合わせについて」『利根川』22 利根川同人 pp.43-47
- 田村博2002「縄文時代における石皿の利用と廃棄―群馬県東部地域における石皿の利用のあり方について―」『中央史学』第25号 中央史学会 pp.1-15
- 田村博2003「群馬県における弥生時代の石皿」『利根川』24・25 利根川同人 pp.366-371
- 田村博2008「石皿と白―堅果類の粉化・搗碎・磨り潰し具の問題―」『白門考古論叢Ⅱ―中央大学考古学研究会創設40周年記念論文集―』中央考古会・中央大学考古学研究会 pp.29-36
- 田村博2010「石皿の縁について―研究史と課題―」『利根川』32 利根川同人 pp.34-39
- 田村博2013a「ふたたび石皿の縁について―石皿分類私案の改訂―」『利根川』35 利根川同人 pp.22-24
- 田村博2013b「弥生時代以降の石皿について―群馬県の例から―」『白門考古論叢Ⅲ―中央大学考古学研究会創設45周年記念論文集―』中央考古会・中央大学考古学研究会 pp.55-66
- 田村博2014「石皿の縁と色―第二の道具として―」『考古学の窓』3 國學院大學卒業生in群馬 pp.15-18
- 田村博(編)2015『田谷遺跡』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 田村博(投稿中)「群馬県における平安時代の石皿」『考古学の窓』4 國學院大學卒業生in群馬
- 鳥居龍蔵1924『諏訪史』第1巻 信濃教育會諏訪部會
- 鳥浜貝塚研究グループ1984『鳥浜貝塚1983調査概報・研究の成果―縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査4―』福井県教育委員会・福井県立若狭歴史資料館
- 中沢悟2017『東宮遺跡(3)』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 中谷治宇二郎1929『日本石器時代提要』岡書院
- 名久井文明2004「乾燥堅果類備蓄の歴史的展開」『日本考古学』第17号 日本考古学協会 pp.1-24
- 長谷川博幸(編)2016『山王・柴遺跡群』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 浜田晋介1992「弥生時代の石皿と磨石―南関東地域の事例から―」『考古論叢神奈河』第1集 神奈川県考古学会 pp.56-81
- 浜田晋介2007「弥生時代の石皿と磨石・再考―植物加工具としての分析―」『西相模考古』第16号 西相模考古学研究会 pp.23-57
- 三輪茂雄1978『白』(ものと人間の文化史25) 法政大学出版局
- 三輪茂雄1987『粉の文化史』(新潮選書) 新潮社
- 三輪茂雄1994『増補 石臼の謎』クオリ
- 三輪茂雄2005『粉』(ものと人間の文化史125) 法政大学出版局
- 米田明訓2013『食いしん坊の縄文人 いざとなったら縄文食―日本の食と心の源流―』(第31回企画展図録) 山梨県立考古博物館